涙なみだの卓球人生

田中清文　東京大学 1978 年卒

小学校時代は、自称「天才野球少年」だった。プロ野球のスター選手になる事を信じて毎日ボールが見えなくなるまで野球で遊んでいた。

そんな野球少年の夢を打ち砕いたのは小学校の担任の先生。「僕はプロ野球選手になるから勉強しなくていい」といったら「全国にはなぁ、お前よりもっと野球がうまいやつが 1000 人はいる。おまえみたいなチビはプロ野球選手になれない」「つべこべ言わずに勉強しろ！」と。純情な野球少年は泣きながら帰った。そして、あっさり野球選手をあきらめて勉強に励む。

その甲斐あって、有名進学校・灘中に合格する。元野球少年は、一転してマイナースポーツ卓球でお山の大将をめざす。しかし同級生に恵まれたか、エース争いはし烈だった。部内試合は、お互いに過度なライバル意識をむき出しにして闘い、負けそうになると泣きながら試合をした。勝った回数が多かったはずだが、負けて泣いた苦い記憶しかない。

高校受験がなかったアドバンテージを生かして中学時代はひたすら練習した。毎朝 1 時間早く学校に行き、ひとりで「必殺サーブ」の練習をした。高校 1 年の時、いきなり大会で好成績を収めて生意気な 1 年生になった。そして試合の前日、先輩が決めた団体戦の選手起用に文句をつけて先輩と喧嘩、ついに「俺は卓球部をやめる」と宣言して泣いて帰る。その夜、先輩が電話をかけてきて表面上は仲直りした。卓球人生最大の危機だった。

中 3 から高 3 の春まで、学校の成績はほとんどビリから 10 番以内をさまよう。母親は先生と懇談があるたびに、卓球をやめて塾へ行かせるようにと言われていたという。母親はそんなことは私には一言も言わず、先生には「そのうち勉強やりますから大丈夫です」と言っていた・・という話を後日知って、母親の想いを感じて思わず涙を流した。

そんな母親の無言の応援で、3 年のインターハイ兵庫県予選、あと一つ勝てばインターハイ代表というところまで勝ち進んだ。しかし、それまで好調だったのに、代表がちらつきあるいは勉強の遅れが気になったか、緊張とあせりで自分の卓球ができない・・・あえなく涙の敗戦。

幸か不幸か、本来ならインターハイへの練習期間、猛勉強をして東大に合格。めでたく東大卓球部に入部する。ここでも強い同級生にめぐまれ、部内試合で負けて春のリーグ戦に出られず。リーグ戦では活躍する同級生をうわべだけの応援・・・。ひとりになった時にくやし涙を流す。

それから 1 年間、必死で練習。2 年になって大ブレイク！　リーグ戦は 3 部のエースを全部撃破して 2 シーズン無敗。その冬の会長杯では中大、日大の期待の新人を破って優勝！ついに歓喜の涙を流す。

卒業後 15 年あまり、自動車会社の開発部門という「夢と理想を追い求める仕事」、言い替えれば「やってもやってもキリのないブラック職場」にどっぷり浸かり、しばし卓球を忘れて涙の味を忘れた生活を送った。

40 歳を過ぎて仕事人間を邁進していた頃、卓球のためなら仕事も家庭も二の次と言う卓球バカと出会う。誘ってくれて、2 人で練習、いや、いじめられる。「卓球バカ」は 40 歳のおやじに向かって「そんなことじゃマスターズ優勝できないよ～」とひたすらフットワークを要求する。「ボールが床に落ちるまで追いかけろ！」と。「そんなの、むりむり～」と言いながらも、スポ根マンガで育った私の身体には妙に心地よく響き、血と汗と涙の特訓が続く。4 年後、ついに全国大会の神奈川代表に

なり、おやじの目に涙。

そして、卓球がんばるぞ〜と51歳でブラック職場を辞めて、卓球の時間が増える。現役時代後輩の面倒見が悪かった償いも兼ねて、10年前から東大のコーチそして監督を継続中。

山梨でも、地元の中学生や高校生を教える。3年間教えた子供が「田中さんのおかげで卓球が大好きになりました」と言ってくれて、「こいつ、いい事いうなぁー」と思わず涙が出そうになる。

現在67歳、東大生の指導はあと3年ぐらいか、中高生はあと10年ぐらいは教えられそうか、それでもマスターズを目指してまだまだ現役。70代か80代で全国1位になって涙を流すのだ。